

## 編集後記

本号は、科学研究費補助金事業（基盤研究（B））「北欧における職業教育・訓練の改革に関する総合的研究——新しい「徒弟訓練」を中心に——」（代表 横山悦生）の中間報告書（その2）として発行させていただいた。第2番目の論文の著者は、2015年3月と8月にウデバラ高校の徒弟教育の実態について見学・調査を行った際にお会いした方である。ビヨーン氏は、その高校の元校長で、現在は学校局(Skolverket)の徒弟教育担当となり、徒弟教育をスウェーデン全域で普及させるためにウデバラ高校での経験を伝える取り組みを行っている方である。もとは社会科の教師であったが、校長として徒弟教育に取り組む中で、その教育的意義を経験的につかみ、リーダーシップを発揮されてきた方である。ウデバラ高校で徒弟教育がなぜ成功したのか、それについて執筆していただいた。

今回の第13号にはロシア語による論文を2本掲載することにした。いずれも冒頭に英語による要約が掲げられているが、多くの読者には読むことが困難なものである。両論文の著者には、次号（2016年4月発行予定）に英語版を執筆してもらう予定である。これらを掲載することになった経緯を記しておく。かつて私の修士論文（1930年代初頭のソビエトにおける労働教育の内容編成原理について）に手を加えて、竹田正直編『教育改革と子どもの全面発達』（ナウカ、1987年）の第10章「労働教育の新たな構想——工場七年制学校（ФЗС）の労働教育プログラム分析——」と題して公刊した（この論文を名古屋大学図書館のレポジトリに登録しようとしたが、ナウカ社がなくなったので、登録できなかった）。当時ロシア語の古い史料を入手することは極めて困難な時代で、この研究テーマについては、その後史料を少しずつ収集してきたものの、論文としては執筆してこなかった。むしろ、その後はスウェーデンに研究対象を変えて、スウェーデン語の勉強を始めた。もう20年近く前のことである。スウェーデンの手工（スロイド）教育は20世紀の初めには全世界の手工教育に大きな影響を与えたが、その事実の探求に向かった。そのなかで、ロシアからスウェーデンに1880年代、1890年代に派遣された人物を知り、その足跡を追うために、サンクトペテルブルグやリガ（現在はラトビアの首都）に足を運んだ。そのような調査を通して、ロシアの革命前の手工教育の到達点を知りうる資料を収集してきた。それと革命後の労働教育との連続性あるいは非連続性に関心を抱いてきた。その調査結果を論文にするには、まだいろいろなことを調べなければならない。今回、国際会議でたまたま出会った、ロシアの歴史学の研究者に、私の関心に近い同僚がいて、その研究者から論文を投稿していただいた。もうひとつのロシア語の論文は、ロシアにおける商業教育の誕生を扱ったものである。現在、私の研究室に日本の商業教育の歴史を研究しようという大学院生がいることもあり、私が依頼して書いてもらったものである。

本研究室の佐々木享名誉教授が2015年5月14日に逝去された。来年5月14日の一周忌の日に「偲ぶ会」を開催するために実行委員会を立ち上げ、その日に『佐々木享先生追悼集』を大空社から発行する計画をすすめている。予価4600円で市販される予定である。多くの人に読んでもらえる内容にしたいと考えている。 （横山悦生）